

109. <始めと終わり>

何かの事業を行うには、“人”“物”“金”の3つの資源が必要だといわれます。しかし、新たな事業を始めようとするときに、3つとも十分な量を揃えられることはめったにありません。何故なら、失敗したときのリスクを考えると、新規事業には持てる資源の余裕代を振り向ける程度が、一般的な組織の常識的な判断だと思われるからです。そこで、組織内で新事業を起こそうとする場合は、与えられた資源を元手にして、事業実施に必要な資源・体制を如何に整えるかが、担当者の知恵の出し処になります。

昔の担当者は、少ない人脈を駆使して調達に走り回るのが常でしたが、最近は少し事情が違って来たようです。一番大きな違いは、インターネットの普及により資源の調達先が組織内に止まらず、世界に広がったことです。「知恵さえあれば、全ての資源を必要なだけ調達できる」環境が手の届くところに出現しました。自分の企画が受け入れられれば、世界中から賛同者が現れ、新事業をバックアップしてくれる世の中になっています。東日本大震災で被災した企業がインターネット上で出資者を募ったところ、あっという間に必要な資金を調達できたというニュースがありました。このようなことは、数年前では考えられないことでした。

今や多くの人々がインターネットを使って一昔前の何倍もの情報を簡単に手に入れています。このような社会環境の変化を逸早く取り入れた組織の枠に囚われない発想が、新事業の実現にも必須になっていると思います。余談ですが、昔は人づてに聞かないと情報が入らなかったのも、身近な人同士の繋がりを自然と大事にしていました。でも最近では組織を含めて社会全体の繋がりが急速に薄れており、東日本大震災は改めてその危うさに気付かされた出来事でもあったように思います。

さて、始めがあれば終わりもあります。昔、先輩から「事業を終わらせるときは、“人”“金”“名”のどれかを残せ！」と言われたことがあります。“名”とは“看板”であり“ブランド名”のことです。何れも新たに事業を起こすときの“資源”となるものです。

物事を始めるときは多くの賛同者が集まるので、勢いがつければ勝手に走り出します。しかし、終わるときは見極めが非常に難しい。どう終わらせるか？次にどう繋げるか？、周囲に迷惑を掛けないため、当事者の決断が真に問われるのは終わるときかも知れません。

<水処理技術開発課 川口幸男>

※ J S 技術開発情報メール No. 123 号(2012/2/6)に掲載